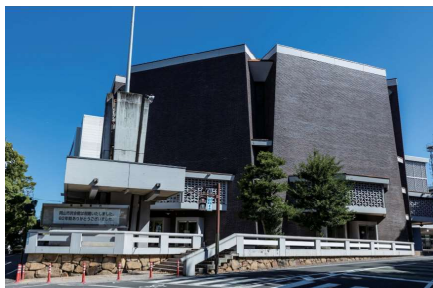




5. 岡山市民会館メモリアル部材の活用について

岡山市民会館について

岡山市民会館は、昭和 38 年に竣工し、コンサート、演劇、舞台、式典など、約 60 年間にわたり様々な目的で使用されてきました。設計者は、日本を代表する公会堂・ホール建築の建築家・佐藤武夫氏（明治 32 年（1899 年）～昭和 47 年（1972 年））で、岡山市民会館は同氏の代表作のひとつとしても知られています。



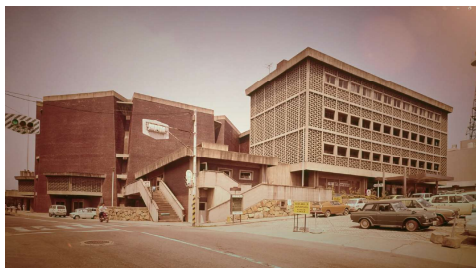
外観 鳥城みちより（白井崇裕氏 撮影）



八角形のデザインのホール棟



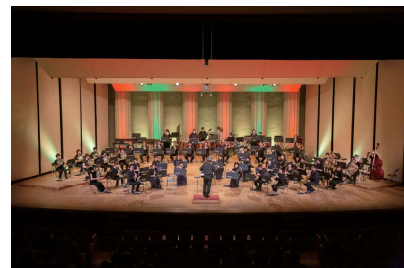
日本画家・吉岡堅二氏の画稿による
レリーフ壁画「牧神」（白井崇裕氏 撮影）



昔の外観
鳥城みちからホール棟と会議室棟が見えました



昭和 38 年 3 月 柿落としの第九
柿落とし：新築された劇場で初めて行われるイベント



OCB（岡山シビックホールプラス）定期演奏会
2012 年より毎年多彩なプログラムで来場者を魅了しました

メモリアル部材の活用検討について

閉館と解体撤去を行うにあたり、有識者とも議論を交え、長年岡山市民に愛されてきた岡山市民会館の記憶を継承すべく、メモリアル性の高い「モザイクガラス」「中空ブロック」「外壁タイル」の一部を保存しました。

現在、公園・広場の設計と並行して、これらの部材それぞれの特徴や状態を考慮しながら、どのような活用方法が良いか検討を進めております。

本日、会場で実際の部材の一部を展示しています！

●モザイクガラス

多様な色を施したガラス製ブロックをモザイク状に積み重ねた壁面。イタリアのジオ・ポンティに師事した建築家・岩淵活輝がデザイン。9 面のモザイク壁がホワイエ全体に連なり、公演前や休憩時に憩う空間にカラフルな色彩表情を与えていました。



（白井崇裕氏 撮影）

●中空ブロック

かつては結婚式場と食堂として利用されていた会議室棟の外壁を構成する幾何学的なブロック壁面。同時期に建設された山陽放送会館と呼応してこのブロック外壁が向かい合うように配置され、一体的な景観が形成されていました。

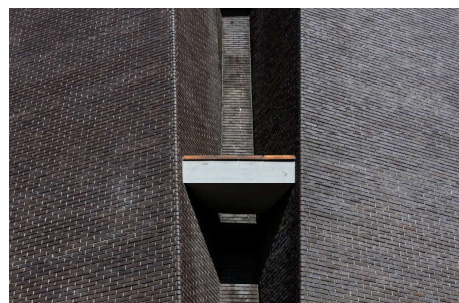


（白井崇裕氏 撮影）

●外壁タイル

岡山県伝統産業である備前焼に似た赤茶色の二丁掛けタイル（※）。表面に刻まれている細かな円弧上の模様も特徴的で、八角形のホール棟のランドマーク性を高めていました。

※二丁掛けタイル：外装用タイルの呼称



（白井崇裕氏 撮影）